

第 11 章 e-ラーニングを活用した リテラシー教育の取り組み

佐 野 琴 音¹

1. はじめに

近年、大学生の基礎学力補強を目的とした教育に対する関心が高まっている。各大学でさまざまな取り組みが行われているが、その中でも特に注目を集めているのが、日本語リテラシー育成を目的とした教育である。大学における学習あるいは研究においては、新しい考えを自ら生み出し、他者に表現できることが必須となる。しかしこのために必要な日本語力は、高校までの中等教育では十分に身につかないのが実情である。

大学生の日本語力教育が注目され始めたのは 1990 年代であると言われる。清水らによる 195 大学 694 学部を対象としたアンケート調査によれば、2010 年時点で文系学部の 37%、理系学部の 24%で何らかの日本語リテラシー教育が実施されている¹⁾。しかし、リテラシーの育成に欠かせない文章の添削指導のための人員や時間の確保、あるいは学生の専攻する分野の専門教員と日本語教員との連携などにおいて多大な困難を伴うため、全学共通のカリキュラムが実施されるケースは少ない。さらに個々の学生の日本語力には差がある場合が多く、このことも効果的な指導を困難にする要因であるといえる。

本学では、時間・場所に制限されることなく個々の学生へ対応できる e-ラーニングの特性を生かし、完全オンラインによるリテラシー教育カリキュラムの構築を進めている。本稿では 2011 年度秋学期開講の教養科目「日本語リテラシー」を中心に、本学のリテラシー教育の取り組みについて述べる。

2. リテラシー教育の意義と目標

まず「リテラシー」とは「読み書き能力」の意であるが、リテラシー教育が目指すものは、読解力や表現力の育成のみに留まらない。この取り組みの根底には、大学における学びの第一歩として、まずは自ら考え、表現しようとする姿勢を身につけることが必要であるという認識が存在する。そのため、自律した一学習者あるいは研究者としてのモラルや心構え、倫理観の育成というような、人間教育的意義も併せ持っている。

1 世界遺産学部 客員講師

リテラシー教育の目標は、大きく2つに分けられる。

① 「学びの基礎」としてのリテラシーの確立：

主に初年次における教育として、学生がこれから大学で学ぶ上で必要な読み書き能力を獲得することを目標とする。同時に、知識を吸収することを主な目的とする受動的な学習態度から脱却し、自ら考え表現する姿勢と能力を身につけることを目指す。

② 「学びの完成」としてのリテラシーの確立：

大学で一定期間学んだ学生が、その完成段階として、学習や研究の成果を公表する上で必要な読み書き能力と姿勢を身につけることを目標とする。

教養科目「日本語リテラシー」は、サイバー大学における学びの基礎として、日本語を「読み」、「書く」技術の習得を目的としている。したがって主に上記①を重視した構成となっているが、講義の終盤においては、発表あるいは議論における責任と倫理にも触れている。以下の章では、「日本語リテラシー」の授業構成について解説する。

3. 「日本語リテラシー」授業構成

3.1 科目目標

大学や社会で必要とされる日本語能力を身につけ、情報を分析し、自ら考え正しく表現できるようになることを目的とする。以下の点を科目の達成目標として掲げている。

1. 書き言葉として適切な文体を用い、文章を書くことができる。
2. 日本語の文の成分と文法を理解し、正しい言葉の使い方ができるようになる。
3. 文章や図表から情報を正確に読み取り、客観的、論理的に分析することができる。
4. 必要な情報を取捨選択し、適切に要約することができる。
5. 知識や情報をもとに主体的に考え、自ら問題を提起することができる。
6. 自身の仮説を客観的な事実によって裏付けし、意見や考察を論理的に書くことができる。
7. 多面的に物事を捉え、立場や意見の異なる他者と円滑なコミュニケーションを図ることができる。

3.2 科目構成

上記の授業の目標に基づき、全8回構成の授業コンテンツを制作した。原則として各回4章構成とし、レポートあるいはディベートによる自由記述課題を設けた第1回、第5回、第8回は3章または2章の構成となっている（表1）。

なお、第2回から第5回まではVideo on Demand (VoD) による講義コンテンツとWeb Based Training (WBT) によるテキストベースの演習型コンテンツを併用しており、

講義形式の授業（第1章，第3章）を受講したのちに，演習問題（第2章，第4章）で理解度のチェックを行う構成となっている。以下に授業の概要と設計の背景を述べる。

表1 「日本語リテラシー」授業構成

回	回タイトル	内 容	課 題
第1回	言葉で表現する	1. オリエンテーション 2. さまざまな表現 3. 文章の種類と日本語表現のルール	レポート ディベート
第2回	日本語の文法と語法(1)	1. 文の成分(1) 2. 文の成分(2) 3. 文法の基礎(1) 4. 文法の基礎(2)	小テスト
第3回	日本語の文法と語法(2)	1. 文の組み立て(1) 2. 文の組み立て(2) 3. 注意すべき用法(1) 4. 注意すべき用法(2)	小テスト
第4回	文章の構成	1. 文章の基本(1) 2. 文章の基本(2) 3. 構成と表現の工夫(1) 4. 構成と表現の工夫(2)	小テスト
第5回	読解と要約	1. 文章と図表を読む(1) 2. 文章と図表を読む(2) 3. 文章を要約する	レポート
第6回	論理的な文章を書く(1)	1. 作文と論文 2. 執筆の手順 3. 問題提起 4. 主張と論証	小テスト
第7回	論理的な文章を書く(2)	1. 結論と考察 2. わかりやすい文章を書くために 3. 発表と議論 4. モラルと姿勢	小テスト
第8回	総括	1. 総括(1) 2. 総括(2)	ディベート 小テスト

① 大学での「学び」における言語表現のあり方

日本語リテラシーを習得するための第一段階として，日本語の表現の多様性を解説し，大学での「学び」において用いるべき表現を意識化させることから始める。第1回「言葉で表現する」においては，日本語の多様な表現と言葉の性質について解説を行う。

まず，日本語は「話し言葉」と「書き言葉」の間に大きな違いが存在する。話し言葉と隔たりのある書き言葉を習得するためには，そこで用いるべき表現や語彙を意識的に学ぶ

必要がある。実際に学術的な文章の記述に慣れていない学生のレポートには、「なんて」「けど」というような話し言葉特有の表現が多く見られる。そこで、俗語や間投詞などを用いた、話し言葉に特有の表現、あるいは「見れる」「食べれる」といった「ら抜き言葉」などの不適切な表現の例を挙げ、書き言葉として適切な文章表現と比較しながら解説を行う。

また、日本語のもう1つの特徴として、「説明文体」と「描写文体」の違いが存在する。個々の事物から抜き出した本質的な特徴を客観的に述べる文章の様式が「説明文体」であり、事物から直感的に捉えられる像（イメージ）を表現する様式が「描写文体」である。

高校までの国語科の授業においては、感性に基づいた主観的な記述、すなわち描写文体で書かれた文章を高く評価する傾向がある。これを特徴的に示しているのが、平成10年度に実施された樺島による実験調査²⁾である。これによれば、ある絵を「その場の様子がよくわかるように書く」という課題に対して、ほとんどの小中学生が絵の様子を具体的に説明することなく、自分の想像や解釈に基づいた文章を書いたと報告されている。また、それを読んだ大人も、絵の様子を客観的に記した文章よりも、想像力を働かせて書いた文章を高く評価している。しかし、「その場の様子がよくわかるように書く」という課題に対しては、本来は事実を客観的に記述することが望ましい。この結果は、日本人の「よい文章」に対する認識の偏りを如実に表している。

論理的な文章を書く上では主観的な表現の使用は不適切であり、説明文体に主軸を置いた書き方が求められる。しかし先に述べたような文章観が一般的であることが、大学で求められる文章を書く上での大きな障壁を生んでいると考えられる。そこで、第1回では「説明文体」と「描写文体」の書き分けを趣旨とする小レポートを課す。このレポートは、後述(3.3)の協調学習を意識したアクティビティにおいても使用する。

② 日本語の階層構造の理解

第二段階として、日本語の構造を体系的に理解することに重点を置く。まずは日本語を「文章」「文」「文節」「単語」という言葉の単位によって階層分けし、第2回から第3回にかけて、単位ごとの特徴と階層間の関連性を解説する(図1)。

第2回の「日本語の文法と語法(1)」においては、まず上記の単位の定義を示した上で、単語の品詞分類と自立語・付属語の概念を解説する。これらの各品詞の特徴から「文節」の概念を構築し、主語と述語等の文の基本となる成分の係り受けを意識させることをねらいとしている。

第3回「日本語の文法と語法(2)」においては、文(句点から句点まで)単位での日本語の構造に着目する。日本語の大きな特徴である文末決定性に着目し、「一つ言えることは、彼らは何も知らなかった」というような主語と述語のねじれや、「古来からの」というような重複表現など、よく見られる誤った言葉の使い方の例を挙げて正しい表現方法を解説する。

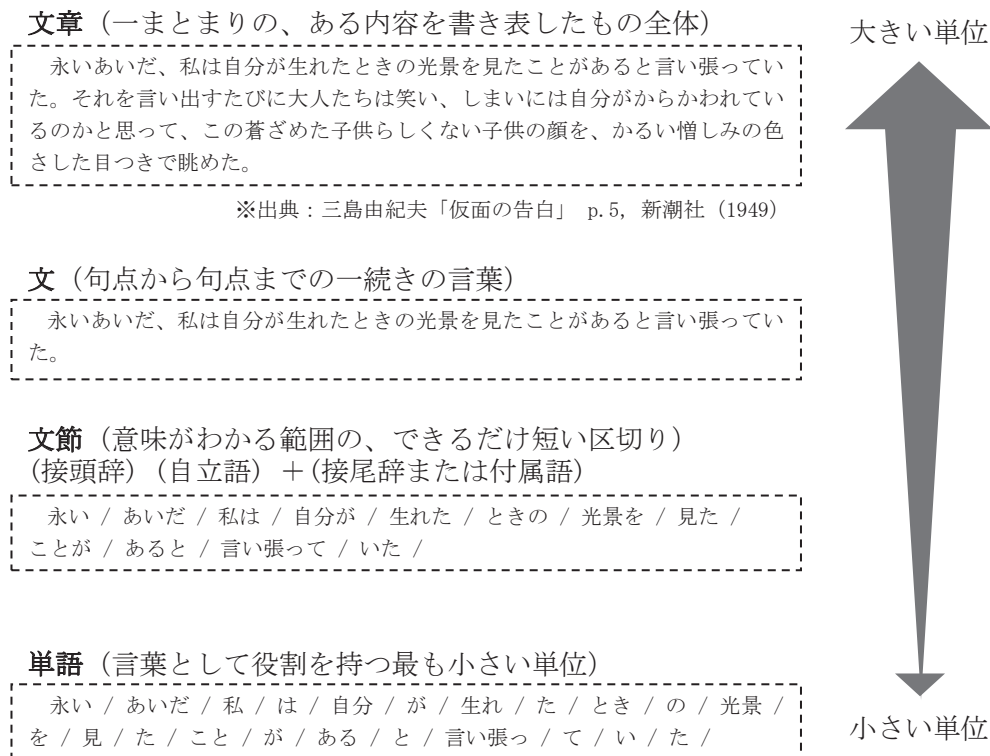


図1 言葉の単位と階層構造

③ 文章の構成

次のステップとして、文章全体の構成に着目する。第4回「文章の構成」では、まず段落の意義、常体と敬体などの文章の基本を説明し、回の後半では「序論」「本論」「結論」の三部構成に基づく一般的な文章の書き方を解説する。

この回では段落の使い方について注意喚起を行っている。インターネット上の掲示板での書き込みやメールなどの文章においては、見やすさを重視するために頻繁に改行を行い、適宜空行を設けることが多い。このような文章形態を見慣れてしまっている学生は「段落」の概念に乏しいことが多く、実際に一文ごとの改行や、章や節の区切り以外での空行の挿入が多数見られるレポートも数多く提出される。このため、段落は原則として内容の一まとまりごとに設定すること、書き出しは1マス下げること、空行は原則として章や節あるいは項が変わるときにのみ用い、段落変更では用いないことなどの形式的な決まりを詳しく解説している。

回の後半においては、文章のアウトラインの作成方法を具体的に解説する。記述しようとする内容をまずは箇条書きで書き出し、その上で「序論」「本論」「結論」に振り分けることによって、わかりやすい文章の流れを構築できるようになることをねらいとする。

④ 読解と要約

第5回の授業内では文章と図表の読み取り方と文章の要約の手順について解説する。数値などの情報を文章化する、あるいは提示された文章を要約するためには、正しい日本語

の表現技術に加え、資料から正しく情報を抜き出す読解力も必要となる。

本講義は全体として、文章を「書く」ことにより重点を置いている。これは、他者の文章を「読む」機会は高校までの学習においても比較的多く担保されているのに対し、既存の情報から論点を見出し、自分がどう考えるかを表現するという機会は決定的に不足していると考えられたためである。しかし、調査や研究を行う上ではまず対象を正確に理解することが必要であり、さらに自分の意見を論理立てて述べるためには、根拠となる事実や先行研究の内容を把握することが不可欠である。このような観点から、この回においては「正しく読み取ること」に主眼を置いた解説を行い、その上で読み取った事実を正しく表現することを趣旨とする中間レポートを課している。

⑤ 論理的な文章の書き方

第6回、第7回は学術レポートや論文の執筆を視野に入れ、論理的な記述ができるようになることを目標として講義を行う。

第6回第1章「作文と論文」では、一般的に高校までの国語科の授業で多く課される作文・感想文と学術レポート・論文の違いについて説明し、論理的思考の重要性について解説する。続いて第2章では、実際に一定の長さの学術レポートを書くことを想定し、執筆の手順を概説する。課題の趣旨をつかむことから最終的な文章の推敲までをフローシート形式で示し、全体の大まかな流れを示した上で、次章以降の具体的な執筆の方法へと解説を進める。

第3章以降はレポート・論文の一般的な三部構成に従い、各部の執筆において注意すべきことを詳しく解説していく。第3章「問題提起」では、自ら論点を見出すことの重要性と、その基本的な考え方について解説する。小論文試験や課題レポートであれば「問い」を与えられることもあるが、通常の論文や学術レポートでは、最初に自ら問題を提起する必要がある。ここでは「問い」の立て方と「序論」における論点の述べ方を示すと同時に、知識を蓄えることに留まらず自ら考えることの必要性について述べる。次の第4章「主張と論証」では、自らの意見を述べ、それを裏付けるという本論の基本的な展開の仕方を解説する。また、根拠の示し方とあわせて引用の仕方と著作権上の注意、情報の真偽の判断についても触れる。

続いて結論の述べ方を第7回第1章「結論と考察」で述べる。第6回で解説した「問題提起」に対する「答え」としての位置づけを示し、最後に文章を締めくくるにあたっての推敲の仕方についても解説する。第2章「わかりやすい文章を書くために」では、ここまでで解説してきた内容のまとめとして、文章の「わかりやすさ」「わかりにくさ」を決定する具体的要因を示し、より「わかりやすさ」を増すための技法として、言葉のあいまいさをなくす、例を提示する、概念図やグラフを活用する等の方策を示す。

⑥ 研究倫理

第7回第3章および第4章においては、ここまでの「日本語の読み書き」の技法に関す

る解説からはやや方向性を変え、学びの成果としての文章を書く上で必要とされるモラルや姿勢について講義を行う。第3章「発表と議論」においては、文章の公開性に伴う責任について、個人情報の保護や誹謗中傷を行わないための注意などの観点から解説する。同時に、読み手（聞き手）としての姿勢についても、受動的な態度から脱却し主体的に学ぶ取ることの重要性について改めて触れる。第4章「モラルと姿勢」では、講義の最終段階として、大学での「学び」と社会との関わり、研究や調査、公表における社会的責任について解説する。

⑦ 総括

本講義は2名の教員がそれぞれのクラスを担当し運用する。第8回においては、第1回から第7回までの講義内容を総括するとともに、それぞれの教員が全体講評を行う。また、期末レポートへ取り組む前の最終課題として必須ディベートを課す。2011年度秋学期の課題は「わかりやすい文章を書く上で大切なことは何か」を次の学期の履修生に向けて書くことによって、知識を共有しない第三者への説明の仕方を確認させるものとしている。

⑧ 期末レポート

以上の全8回の受講後に、最終試験として期末試験レポートを課す。複数のテーマの中から受講生自身がいずれか1つのテーマを選択し、より具体的に絞り込んだ問題提起を自ら行った上で論を展開することを求めるものである。レポートのテーマは日本十進分類法による区分を参考に幅広い分野から選定し、さらに授業運営時に関心を集めている時事問題等も考慮して出題する。

3.3 e-ラーニング環境における協調学習の工夫

e-ラーニングによる授業体制は、時間や場所による制約を排除できる一方、受講生同士が協同で考える機会を十分に確保することが難しく、孤立した環境での自学自習が中心となりがちである。そこで、非同期の学習環境においても受講生同士がコミュニケーションを図れるよう、本学では「ディバートルーム」を設置している。これを活用し、本講義では受講生が互いのレポートにコメントを寄せあうというアクティビティを取り入れている。

具体的な流れは図2のとおりである。まずはレポート課題を提示し、提出されたレポートを教員側でディバートルームに掲載する。数名ずつのグループ内で互いにコメントを寄せあうものとしたが、他のグループへのコメントの書き込みも可能である。

実際の受講生の書き込みには、他の受講生のレポートへのコメントとともに、「他のレポートを読むことで、さまざまな表現のしかたがあることに気付いた」という書き込みが数多く見られた。アクティビティ後の任意ディバートルームにおけるコミュニケーションにもつながっており、協調学習による創発的効果がうかがえる。

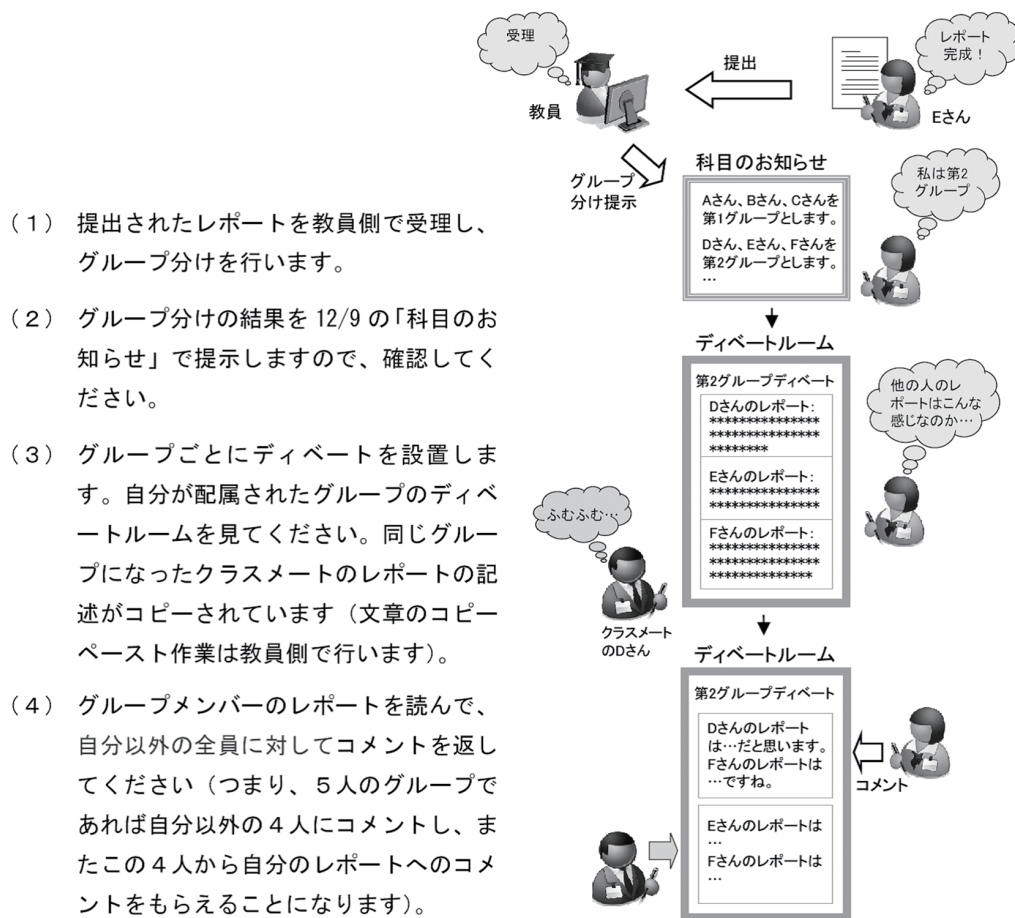


図2 ディベートルームを活用した協調学習の取り組みの流れ

（2011 年度秋学期「日本語リテラシー」A クラス学習資料より）

4. まとめと展望

本稿では教養科目「日本語リテラシー」を中心に、本学のリテラシー教育の取り組みについて述べてきた。学習効果の分析などにおいて今後の課題は多く残されているが、e-ラーニングにおける演習形式のアクティビティや協調学習のための環境は整いつつあるといえる。

e-ラーニングシステムの大きなメリットは、学習管理システム（Learning Management System: LMS）と連携させることによって、受講生のアクセス履歴、学習時間、進捗状況、成績などの学習過程におけるデータを蓄積することができる点である。このメリットを最大限に活用するためには、学習効果、すなわち受講生のリテラシーが受講の前後でどう変化したかを、いかにして測定するかという問題を考えなければならない。

日本語力の客観的評価方法としては、小野らによって開発された「大学新入生のための

プレースメントテスト」が代表的である³⁾。これは語彙力テストによって受験者の日本語力を簡便に段階分けできる方法であるが、例えば「話し言葉を使用しない」「推測と事実を書き分けられる」というような、アカデミックライティングにおいて必要なリテラシーのレベルを測ることは難しい。このような能力は自由記述課題に対して教員が個別に評価を行っているのが現状であり、その客観性や作業量には限界がある。リテラシー教育カリキュラムの今後の展開を考える上で、学習効果を簡便かつ客観的に評価することは重要であり、そのための指標をいかに構築するかが今後の大きな課題の1つであるといえる。

また、本稿では「日本語リテラシー」を中心に述べてきたが、その他のリテラシー科目として、2011年度秋学期時点で「サイバーリテラシー概論」「プレゼンテーション実論」「文書作成と表計算」「レポート・論文の書き方」の4科目が設置されている。先述のとおり、リテラシー教育は「学びの基礎」から「学びの完成」までの幅広い知識と技術、姿勢を身につけることを目標とするものである。その実現するためには、大学生活全体あるいは卒業後の進路選択、キャリア形成までもを見据えたカリキュラムを構成する必要がある。したがって、今後は大学全体のカリキュラムマップにおける各リテラシー科目の位置づけを系統的に捉え、科目の枠を超えた連携を図りながら授業の運営と改善を進めることが重要であるといえる。

高等教育におけるリテラシー育成のための取り組みはまだ歴史が浅く、その方法論は確立されていない。本学の取り組みはe-ラーニングによるリテラシー教育のカリキュラムモデルとして、大学におけるリテラシー教育のあり方に1つの指針を示しうるものであると期待される。

参考文献

- 1) 清水 史, 秋山英治「高等教育における日本語リテラシー教育の現状と課題」愛媛大学法文学部論集 人文学科編 28, pp.83-116 (2010)
- 2) 樺島忠雄「文章表現法——五つの法則による十の方策——」角川選書 (1999)
- 3) 小野 博他「日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育」NIME 研究報告第6号 (2005)